

書評

伊藤聡著

『神道の形成と中世神話』

(吉川弘文館・二〇一六年)

松本 公一

伊藤聡氏の『神道の形成と中世神話』は、前著『中世天照大神信仰の研究』に続く氏の論文集である。中世神道に関するパオニアの一人であり、研究の牽引者である。本書は著者の中世神道にかかわるいくつかのテーマについての論考を集めた一書であり、自身も「中世神道および中世神話（中世日本紀）の意味を総合的に考えようとした論考を中心に構成されている」と記しておられる。

さて、本書の構成は、目次によれば、序章「神道」の中世

第Ⅰ部 中世神道研究の歩み

第一章 戦前戦後の中世神道研究

第二章 説話研究と中世神道

第Ⅱ部 中世の本地垂迹思想

第一章 本地垂迹思想の展開

第二章 愛染明王と天照大神

第三章 中世における祝詞と和歌の習合

第四章 雑書の世界

第Ⅲ部 中世神道・中世説話・伊勢神宮

第一章 神道の形成と中世神話

第二章 中世における古代神話の継承と受容

第三章 幻視される始原——中世神道書における天地創生

説

第四章 中世における神道説の類聚

第Ⅳ部 中世寺院と神道流派の成立

第一章 中世神道の形成と無住

第二章 神道諸流の形成

終章 中世神道研究の可能性

という構成がとられている。序章においては、収録された論文の概要が述べられ、大きくみれば第Ⅰ部が研究史、第Ⅱ部が本地垂迹説の中世の具体相、第Ⅲ部は、本書の中核を成す、と著者自身が述べられるように、中世神道の展開の実体論、そして第Ⅳ部は僧侶による中世神道の形成についての論考となる。そして、終章において総括と今後の方向性が示されている。

それでは、以下、著者による序章における各論文のまとめに導かれながら、もう少し個々の内容について、第Ⅰ部から述べていくことにする。

第Ⅰ部は中世神道の研究史を概観したものである。第一章「戦前戦後の中世神道研究」において、戦前、明治からの研究史から戦後の一九八〇年ごろまでの研究史を概括し、とくに戦前に『文科』という同人誌にて研究活動をしていた鏡島寛之という研究者について紹介されていることは新知見であるといえよう。ちなみにこの鏡島寛之（一九二一～一九四六）は、曹洞宗の僧侶で、静岡県・泉竜寺の住職、回教圏研究所研究員でもあった。「回教教理」「各国におけるコーランの翻訳」という論文を遺している（平成二十七年三月一日の、NHKラジオ第二の「宗教の時間 仏教からみたイスラーム」「宗教の時間へようこそ」HPによる）。

第二章の「説話研究と中世神道」では、一九七〇年代を揺籃期とし、いわゆる「中世日本紀」「中世神話」研究がはじまり、一九八〇年代を沸騰期と位置づけ、即位灌頂研究とアカデミズムではない、サブカルチャーからの研究、さらにはニューアカデミズムによる研究動向も紹介し、つづく一九九〇年～二〇〇〇年代を定着期ととらえ、中世文学研究の課題として定着し、さらには文献公刊も活発になされたこと、日本史学においても、文学研究に触発される形で研究が行なわれたことにも触れている。加えて、二〇〇〇年代には海外においても研究が活発化したことを紹介する。ここで著者は、日本思想史、神道史学といった分野は、研究に対する反応は決して活発ではなく、それは

一次資料の発掘・調査に積極的でないことが大きいことを理由としてあげられ、一方において従来は文化史的な側面、文芸との関わりに関心が集中していることを指摘し、今後は思想的内実に分け入っていく思想史の分野においての研究が必要であると結んでいる。

第Ⅱ部「中世の本地垂迹思想」では、第一章「本地垂迹思想の展開」において、中世における権神・実神の区別があり、それが浄土宗・浄土真宗にも広がっていたこと、殺生祭神、蛇身としての神とそれを感じ得する方法としての伊勢灌頂、苦しむ神としての蛇身となった女神、天竺・震旦・日本の三国関係における中世神道書の国土観、吉田神道の本地垂迹論として、吉田兼俱は、本地としての神Ⅱ心と垂迹としての仏菩薩以下全ての事象という説であったとする。結論として、「神は我々に内在する」という、「神・心（人）一体観」という新たな観念が生み出された、とされた。

第二章「愛染明王と天照大神」では、愛染明王と天照大神の習合の過程について、前提・発生・展開について仏書・西大寺観尊と彼が関わった造形資料（大神宮御正体厨子・愛染明王坐像）・中世神道書などにより跡付けたものである。

第三章「中世における祝詞と和歌の習合」では、和歌陀羅尼が中世神道書に取り入れられたものを紹介する。また、中臣祇の陀羅尼化、神道灌頂作法における和歌として父母代灌頂という御流神道の灌頂のなかで和歌がどのように使われたかを説明

し、和歌と祝詞（とくに中臣祓）が特徴的な言語表現であるとした。

第四章「雑書の世界」では、兵法、弓術、医書などの様々な学問についての書物である「雑書」のなかで、弓術書にみえる中世神道の言説や胎内五位説の神道書や雑書への流入を紹介し、これらは「体系性や諸学を統率する主導原理を持たない」中世学問の性格のなかで、本来は異質な諸説が相互に結び合い、そのなかから新たな説が生み出されてのも当然である、とした。

第三部「中世神道・中世説話・伊勢神宮」は本書の中核をなす部分であるとされる。

第一章「神道の形成と中世神話」では、もと『日本思想史講座』に掲載されたもので、伊勢神宮で起こった両部神道書・伊勢神道書により「内なる神」（神は心に存在すること）、「始原の探求」として天地開闢・国土創生というテーマについて密教・禅・道家思想が渾然となり、形成されたことを、「灌頂と観想」では神とのコミュニケーションの実践としての灌頂や観想について、伊勢に参宮した僧徒たちの実践的儀礼として理解できるということを述べられた。この章の内容は、他の章にも述べられるものである。

第二章「中世における古代神話の継承と受容」では、国土創生譚としての第六天魔王譚、大日印文モチーフ、盤古神話の利用、神功皇后譚の中世における変質、といった中世神話への考察である。

第三章「幻視される始原——中世神道書における天地創生説」では両部神道書における、神前の観想法について再構成し、鎌倉時代の神道書は神前の観想という宗教的実践から形成されたテキストであると述べられている。

第四章「中世における神道説の類聚」では、平安末以来、伊勢神宮周辺で作成された神道書は、『類聚神祇本源』『元々集』にまとめられ、地域限定的なテキストが、普遍的なものへと変化をとげ、それは天台宗の山王神道の『山家要略記』にもみることができ、さらに伊勢、日吉という特定の場所にかかわらないものとして『神祇秘抄』が編纂されたことを論じている。

第四部「中世寺院と神道流派の成立」では、第一章「中世神道の形成と無住」では、無住の『沙石集』巻一の第一・第二話の伊勢神宮に関わる説話が、どのようなネットワークのなかでもたらされたかについての考察で、東大寺戒壇院西迎上人蓮実・初代戒壇院長老円照・東大寺真言院聖守・源慶（発心上人）・木幡真空と憲深・頼瑜、三輪流慶円と蓮道・空観、禅忍（三輪上人）と唯心上人、法灯派祖の無本覚心などを取り上げ、伊勢参宮を行った僧、あるいは禅のネットワークという複数のラインより考察されている。

第二章「神道諸流の形成」では、両部神道の流派形成について考察したもので、鎌倉後期以後に三宝山院流や西大寺流が神宮に進出し、神道書の相伝に関わり、その後、三宝山院御流の神道相承、御流神道の形成、三輪流・三輪流神道について述べ、神

道流派は、はじめからあったわけではなく、顕密諸宗・諸流の秘説相承が大本で、その後に神道相承についての独特の系譜意識が生まれ、三輪流・三輪流神道として自立した存在となった、と考察された。

終章では、再び各章の総括をと課題を述べられている。

非常に簡単にはあるが、本書の内容を紹介してみた。ここで、評者が疑問に思ったことや気がついたことを述べさせていただくことにする。

まず、「中世神道」という概念についてである。本書で論じられているのは、いわゆる両部神道と一般に称される伊勢神宮をめぐる言説が大多数である。本書の終章でも著者が述べられているが、山王神道や吉田神道、反本地垂迹説についてはあまり言及されていない。本書で展開される「中世神道」は、当時の中世社会において、どれほど一般的なものであったか、確かに能や『太平記』のような文学作品に中世神道説あるいは中世神話はみえるが、果たしてこれらは普遍的に知られたものだったのか、あるいはやはり僧侶たちのネットワークのなかからこぼれ出たものなのか。気になるところである。また、「中世神道」は僧侶たちの間では活発な伝授や書写活動もおこなわれたであろうが、逆にそのネットワークに関わらねば、知ることのできないものでもあったのではないだろうか。

このことは、テキストそのものの問題でもあるかもしれない。

近年これらの史料は、影印や翻刻が進み、ここ三十年ほどで飛躍的に進展した。しかし、一方で真福寺大須文庫、金沢文庫、高野山大学などには、未だ紹介されていない史料もあり、とくに調査等に関わっている研究者でなければ、閲覧の叶わないものも数多くあることも事実であって、この意味では、多くの研究者がまだ容易には研究に参入できないという現状がある。

また、これも史料的な問題であるが、先にあげた史料の伝来の多くは真言宗・真言律宗の寺院が多く、そのため現在の研究の中心は真言系が中心となっている。しかし、天台宗寺院などに伝来する聖教のなかにも、即位法等にもいわゆる中世日本紀に類するものもあり、これらを含めた場合、中世神道とはどのような像を描けるのであろうか。

さらに、テキスト自体、仮託書が多く、その成立は内容から判断をしなければならぬものもあり、著者も述べているように、新しいテキストが発見されれば、それまでの理解や解釈の再検討が必要になる、という面も持っている。常に研究成果の書き換えを迫られるという流動的な面があるのである。

著者が強調される中世神道の重要な点である、「内なる神」についてであるが、はやく石田一良は、中世仏教において、親鸞は、阿弥陀仏は我々一人ひとりの心のなかに存在すると説いているし、また、臨済禅においても、仏は人の中にあるので、坐禅によりその仏を見出すといった思想がある、と指摘している（石田一良『大世界史12 日本の開花』文芸春秋、一九六八年）。

著者のいう中世神道の「内なる神」は、このような思想とは全く無関係につくり出されたものなのか、何らかの影響関係があるのかは、一つの課題であるように考えられる。

加えて、これはないものねだりであるが、「中世神道」は、中世の神祇信仰の実態、春日信仰・八幡信仰・熊野信仰といった、当時の信仰世界とどのように切り結ぶのか、たとえば著者の伊藤氏も参加される真福寺には熊野関係のテキストも伝来しており、その中に両部神道に関わる記述が含まれていたり、また寺院聖教全体の伝来のなかでの位置づけについても、課題となるのではない。さらに、「金玉要集」のような中世の唱導テキストにも神祇を扱ったものが収録されるが、このような史料のなかに入ってくる「中世神道」の問題もあるのではないかと考える。

最後に、これは論文集の性格上、仕方のないこともあるが、いくつかの論考にまたがり、同様な論旨、主張の繰り返しが見られる。通読してみると、繰り返し同じ内容が説かれているために内容を理解する上には丁寧ともいえるが、一方では、やや屋上屋を重ねるといった印象も感じてしまった。

以上、評者が、疑問に思うことを指摘したが、当方の理解不足や誤読による、内容の誤解もあるかもしれない。この点についてはご寛恕を請う。しかしながら、本書は、長年にわたり資料調査と研究により達成された、中世神道研究の到達点の一つであろうと考えるし、この分野の研究をおこなう者には必読の

書であろう。本書の研究の展開としては、原克昭、鈴木英之、船田淳一らの業績があるが、思想史研究の分野において、本書の成果を、いかに批判的に継承し、より広く、多岐にわたる切り口で展開させていくかが、このジャンルの研究の課題となるであろう。

(池坊短期大学教授)